

翻 訳

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈（7）

中 沢 敦 夫

富山大学人文科学研究第 82 号抜刷

2025 年 2 月

翻 訳

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈（7）

中 沢 敦 夫

6701（1193）年

【大主教ガヴリールの死去と後任マルティールイの選任・叙任の物語：1193年5月24日～1194年1月16日】

ノヴゴロドの大主教ガヴリール（Гаврила）が逝去した。奇蹟の丘のわれらが¹⁾ 聖師父シメオン²⁾（Симеон, иже на Дивнѣи горѣ）の記念日5月24日だった。聖ソフィア教会の啓蒙所の兄³⁾の傍らに丁重に⁴⁾ 安置された⁵⁾。〔ガヴリールは〕修道名をグリゴリーイ（Григории）と呼ばれていた⁶⁾。

その後再び⁷⁾，ノヴゴロド人はヤロスラフ公[D1153]とともに，また，典院たち，ソフィア衆

1) святого отца нашего の下線部は *Км* の固有読み。*Ак*, *Сн* にはない。以下では、*Сн*, *Ак* の読みと比べて *Км* 固有の読みで、明らかに *Км* 系統の編者（写生字）による後代（15世紀初め）の装飾的な付加と判断される底本（*Км*）の読みについては、訳文に下線を付すこととした。

2) 「奇蹟の丘のメオン」（*Сн*, *Км* Симеон, иже на Дивнѣи горѣ; *Ак* Симеон Дивногорьц）は、「柱頭行者小シメオン」（ハリストス正教会「登塔者」）（Симеон столпник младший; Συμεών ὁ νεώτερος ὁ Στυλῖτης）とも呼ばれる6世紀後半（†596/597）の行者聖人で、「奇蹟の丘」（Дивная гора; Θαυματόν Ὅρος）で柱頭の行を行ったことから、ルーシの正教会では地名を付して呼ばれていた。この丘は、現在のトルコ共和国中南部オロンテス川（Orontes）河口、古都アンティオキア近くの丘の歴史的な地名である。

3) この「兄」（брат）は、ガヴリールの前任の大主教で実の兄である大主教イオアン（イリヤ）のこと。イリヤは1186年9月7日に没しておりソフィア聖堂の啓蒙所に遺体が安置されたことは、6694(1186)年の記事に記されている〔ノヴゴロド第一年代記（6）：注393〕。

4) 「丁重に安置された」（положень бысть честно）の честно は、*Км* のみの固有読み。

5) 大主教イオアン（イリヤ）はソフィア聖堂西側のコルスーン側廊と呼ばれる啓蒙所に埋葬されており〔ノヴゴロド第一年代記（6）：注393〕，考古学的発掘によれば，確かにガヴリールの遺骸は同じ啓蒙所の兄イリヤの北隣に埋葬されている〔Янин 1988: С. 192, 194〕。

6) 「グリゴリーイ」（Григории）は，ガヴリールが死の前にしてスヒマ修道士となったときに名乗ったスヒマ修道士名で，「ノヴゴロド主教表」[109]（〔ノヴゴロド第一年代記（2）：注621〕）にもこの名でリストアップされている。

7) 異読があり，*Км* и пакы по временѣ, *Ак* и по семь пакы, *Сн* なし。

(софьян) たち⁸⁾、司祭たちとともに内輪で評議した⁹⁾。

〔かれらの内で〕¹⁰⁾ ある者たちは〔大主教の後任として〕ミトロファン¹¹⁾ (Митрофан) を望み、他のものはマルティーリイ¹²⁾ (Мантурии) を、ところがこの者たちは再びグレチン¹³⁾ (Гричин) を望んだ。再びかれらの間で少なからぬ諍いが生じた。そこで、かれらは自分たちの間で言っ

8) ここで「ソフィア衆」(софьяны; софияны)と訳した語は、6694(1186)年のガヴリールの主教選任の同類の記事で「聖ソフィアの教衆たち」(крилос святых Софѣя)となっていることから、聖ソフィア聖堂の聖職者たちのことである〔ノヴゴロド第一年代記(6):注394〕。かれらは、1193年の主教選任にあたっては特別な地位を得ていたことが分かる。

9) 次の大主教を誰にするかについて相談したということ。「内輪で評議した」は三写本ともに異読があり、*Сн съдумавыше, Км думаеша собѣ, Ак гадаша промежу себе. Сн* の *сдумати* の語はこの写本で何度も使われていることから本来の読みであり、*Км* と *Ак* の読みはその追加、改変によると考えられる。

10) このゴシック体の段落は *НІ-М* のみの読みであり、明らかに *НІ-С* (*Сн*) のテキストに対して、後代に挿入されたものである。挿入は1199年後半の編集の際になされた可能性があり(下注33)、この時初めて、ノヴゴロド大主教が三人の候補者を立てる方法で選ばれたというのは、おそらく史実を反映しているだろう。

11) 「ミトロファン」(Митрофан)は、マルティーリイの死後、後任として、1199-1212、1220-23年の期間ノヴゴロド大主教を務めた人物。この時点でどのような職についていたかは不明[Карпов 2017: С. 286]。16世紀の『ニーコン年代記』1193年記事には、三人の候補は当時「典院」(игумены)だったとあり[ПСРЛ Т. 10, 2000: С. 21]、大主教候補に選ばれたほどだからミトロファンもノヴゴロドのいずれかの修道院の典院だった可能性はあるだろう。後の活動から見て、リュージン区との関り(出身者?)も指摘されている[Православная энциклопедия Т. 45: С. 472: Митрофан]。

12) この「マルティーリイ」(*Км, Ак* Мантурии; *Сн* Мартурии)については、6700(1192)年記事で、ルーサ(Руса)の主の変容修道院典院としてすでに言及されている〔ノヴゴロド第一年代記(6):注469〕。なお、「マルティーリイ」(Мартирий; Мартѳоріус)はギリシア語起源の人名で、Мартурии (*Сн*) は文字通りの転記。Мантурии (*Км, Ак*) は、Мартурии を発音しやすく変えた通用名だろう。

13) この「グレチン」(Гричин)の名は通称(世俗名)で、ギリシアとかかわりが深いこと(ギリシア語に堪能、コンスタンティノポリスへの滞在経験?)から付けられた一種のあだ名であり[Гиппиус 2005: С. 101-105]、この名で通用するほどの著名で有力な人物だったと考えられる。本年代記(*НІ-М*)によれば、1226年には、聖コンスタンティノス大帝とエレナ教会(ネレフスキ区)の司祭だった「グレチン」(Гречин)が修道士になって、聖ユーリイ修道院の掌院(アルヒмандрит)に任じられている。かれについては「讃頌経」(стихирарь)への書き込みから、かれの修道名がサヴァ(Савва)であることが知られている。また、1229年の大主教アントーニイの後任を選ぶ記事でも、籤引きの三人の候補の三番目に Грѣчин (Гръцин) の名が再度挙げられており。さらに1231年には掌院の職を追われて幽閉され、6週間後に病死している。本記事を含め、これらの「グレチン」は、人の一生に収まる時期の年代記に記されており、他の時代には言及はないことから同一人物と見てよいだろう。

他方、*НІ-С* 1196年記事には、Гречин Петрович という絵師についての言及があり、これは白樺文書にあらわれる Олисеи Гречин という絵師(リュージン区チェルニツァ通り在住)で1180-90年代に公との共同裁判に関与していた人物と同一人物であることはほぼ間違いない。

問題はこのサヴァとオリセイの二通りのグレチンが同一人物であるかということだが、ヤーニン(ヤニン)は同一人物として、かれの一生とその事績を再構成している(松本の詳細な研究も基本的に同様だが、かれはギリシアからの渡来者であるとしている[松本 2002: 17-63頁])。

た。「聖ソファアの聖なる宝座に三本の籤を置こうではないか」。たちまち〔籤が〕置かれて、聖なる聖体礼儀を歌う〔執行する〕よう命じられた。この奉事が終わると、民会からひとりの盲人が派遣された。「どうか神がその者を与え給え」¹⁴⁾〔というのである〕。

神の恵みによってマルティーリイの籤が〔盲人によって〕引かれた¹⁵⁾。そして、かれ〔マルティーリイ〕を呼び寄せる使者が派遣された。そして、ルーサから (из Русѣ)〔マルティーリイが〕連れて来られた。そして、かれを主教館に¹⁶⁾据えた。そして、府主教のもとにかれについて〔叙任を求める使者を〕派遣した¹⁷⁾。

そして、府主教は再び、大いなる名誉をもってかれ〔マルティーリイ〕を招聘する使者を派遣した。こうしてかれ〔マルティーリイ〕は高い身分の者たち¹⁸⁾とともに〔キエフへと〕出発した。〔キエフの〕スヴァトスラフ公[C411:G]と府主教は親愛をもってかれを迎え入れた。そして、かれを〔大主教に〕叙任した。12月10日、聖なる殉教者たち、ミナ、エルモゲン、エ

14) 鍵カッコ内で訳した箇所原文は *Км да котораго дасть Богъ, Ак да коего намъ Богъ дасть*。この後者の文言は、1229 年に行われた大主教選出の籤引きの際に、ノヴゴロド公ミハイル [G42] の言葉として文字通り繰り返されている。それゆえ、「どうか神がその者を与え給え」の「その者」はこれから選出される大主教を指し、この言葉全体は選出儀式の際に公が発する儀礼的開会宣言の文言と考えられる。なお、この儀式で三人の候補者を選ぶことについては、ビザンツ教会法の伝統を取り入れたものだが [Мейендорх 2000: С. 394, 401 прим. 34] [松本 2004: 159-160 頁]、籤引きによる決定、それも目が見えない者が引いた籤による決定については、これを神の意志の表れ、一種の神判であるとする伝統的な習俗に拠っている。

15) この文は、*Км, Ак и выняся Божию благодатию Мантуриа; Сн изволиша Богомъ избрана Мартурия* (神によって選ばれたマルトゥーリイを〔選任した〕)と異同がある。前者は、上の段落の「籤」についての長い挿入の表現にあわせて、「籤が引かれた」(выняся)の動詞を用いて改変したものだろう。後者は、изволиша поставити の下線部が省略されていると考えられるが、1156 年のアルカージイ選任および 1186 年のガヴリール選任の記事の表現 (三写本共通) に似ていることから、この *Сн* の読みが本来のものと考えられる。Богом избрана の表現も 1156 年記事にあることから、*Сн* のテキストは籤引きによる決定法には無関心だったと考えるべきだろう。なお、この部分については松本による検討がある [松本 2002: 158-161 頁]。

16) 「主教館に」(въ епискополѣ дворѣ) は *Км* の読みで、*Сн въ епископини, Ак въ дворѣ святыя София* と異同がある。読みの動きとしては、ひとまず *Сн* ⇒ *Км* ⇒ *Ак* が考えられる。

17) *Сн* は *послаша къ митрополиту* と誰を何のために派遣したか不分明な書き方になっている。*Км* では *послаша о нем...* と付け加えることで、使者を派遣したことがはっきりしている。ただ、*Ак* 系統の写生字は *о нем* (かれについて) だけではあいまいと判断したのだろう、*к митрополиту* のあとに *глаголюще: «Постави намъ владыку»* (「われらのために猊下を叙任されよ」と言って) の文言をさらに付け加えている。

18) 「高い身分の者たち」と訳した原語は *передние мужи* で、ノヴゴロド貴族の中のとりわけ位や格式の高い者を指している (下注 119 参照)。

ウグラフの記念日だった¹⁹⁾。〔マルティーリイは〕1月16日²⁰⁾、聖使徒ペトロの鎖の記念日に〔ノヴゴロドに〕到着した。

【ヤドレイコによるユグラ遠征とその失敗。ヤコフ殺害の策謀：1193/94年冬】

同じ年、ノヴゴロドからユグラ²¹⁾ (Югра, Югря) へ向けて軍司令官ヤドレイコ²²⁾ (Ядрѣико) とともに遠征部隊が²³⁾ 行軍した。かれらはユグラへ到着して、城砦を占領した。それから、別の城砦へ向けて進軍した。その城砦では〔ユグラ人が〕城内に立て籠った。そして、〔遠征軍は〕城下に5週間布陣した²⁴⁾。

〔城内から軍使が〕かれら〔包囲軍〕のところにきて、巧言を弄して次のように言った。「われらは、銀を、クロテン毛皮を、他の高価な装飾品を集めます²⁵⁾。どうかわれらを、自分た

19) この12月10日の記念日の表記には大きな異読がある。「聖なる殉教者たち、ミナ、エルモゲン、エウグラフの記念日」(на память святых мученикъ Мины и Ермогена и Еуграфа)は*Км*の読みだが、*Ак*ではна пмять святого Мины и Ермогенаになっている。さらに、*Сн*では、на святого Данила стильпникаと大きく異なっている。11～12世紀のスラヴ典礼書の聖人暦(Служебная)によれば、*Км*の読みが正しく[Полный месяцеслов Востока I: С. 477]、*Ак*では三人目の聖人名(Еуграф)が削除されている。*Сн*のДаниил столпник(† ок. 489–490)は、上記聖人暦では12月11日に列聖されている。おそらくは、本来の*Сн*の聖人名が誤記だったのを、*Км*系統の編者が訂正し、さらに*Ак*系統の写字生が聖人名を脱落させたのではないか。

20) 1194年1月16日に相当する。

21) 「ユグラ」(Югра)はオビ川とベチョーラ川に挟まれた地方で、のフィン＝ウゴル系の民族(現在のマンシ人(ヴォグール人)やハント人(オスチャク人)の祖先)が居住していた。ユグラへの徴税遠征が失敗して徴税官たちが殺されたことについては、1187年の記事にもあり[ノヴゴロド第一年代記(6): 注412]、この1193年の遠征は、1187年の事態と関係があり、懲罰的な性格があったのではないか。ユグラのどの「城砦」(город)へ遠征したのかについては特定できない。

22) 軍司令官の名に異読があり、*Км*、*Ак* Ядрѣико; *Сн* Ядреи。このЯдреиはギリシア語人名 Андрей (Ἀνδρέας)の通用形で、Ядрѣикоはその指小形とする説と、動詞 ядрети(強くなる)から派生したスラヴ語起源の名とする説[Баженова 2006: С. 522]の二つがある。13世紀初頭にノヴゴロドのフーティン修道院の第2代典院で、その後ノヴゴロド大主教になるアントーニイの俗名はДобрыня Ядрейковичであり、かれはこの記事の「ヤドレイコ」の息子と推定される。ヤドレイコは、徴税遠征部隊の総司令官を務めていたことからノヴゴロド上級貴族の出身と考えられる。

23) 「遠征部隊が」と訳した原語は ратью。で文字通りでは「戦争をするために」ということ。1187年にユグラ地方で徴税官に対する反乱が起きたことから(上注21)、これに対する大規模な懲罰と徴税体制の確立のために遠征部隊が組織されたと考えられる。

24) 「城下で布陣」(стояша под городом)の始まりは、聖ヴァルヴァラの日の前日の5週間前なら、1193年10月29日、聖ニコライの日の6週間前なら10月25日になるが、いずれにせよ10月末に城砦の包囲を始めたことになる。

25) 「集めます」には異読があり、*Км* собираемъ; *Сн*、*Ак*、*Н4* копимъ。後者はそのあとの а вои копяще(集めたのは軍兵だった)の言葉遊びで使われており、その意味で後者が本来の読みである。

ちの領民たち²⁶⁾ (смерди) と自分たちの貢税を減ぼさないで下さい」。その間にかれら〔籠城のユグラ人〕が集めたのは軍兵だった。そして、すでに軍兵が集まったときに、かれらは城内から、ノヴゴロドの²⁷⁾ 軍司令官〔ヤドレイコ〕のもとに〔軍使を〕派遣して、こう言った。「あなたは城内に入られよ²⁸⁾。12人の《上級の》家臣を連れて」。

《軍司令官は》城内へ入った。司祭のイヴァンコ＝レゲン（Иванко-Леген）と²⁹⁾ 他の上級の〔家臣を〕ともなうて行った。かれらは斬り殺された。聖女ヴァルヴァラの記念日の前日だった³⁰⁾。再び〔軍使が城内から〕派遣され、30人の上級の家臣を連れて〔城内へ〕入った³¹⁾。かれらも斬り殺された。

そして、その後、50人。かれらにも同じことがなされた³²⁾。

26) ここで使われている「領民」(смерд) とは、公の所領の農民であり、公に対する貢税義務を課せられた者を指しており、史料では基本的に公への貢税徴収とのかかわりで言及されている〔ノヴゴロド第一年代記(4)：注162〕。ここで、ユグラ人が自分たちを「領民」と称しているのも、それだけで貢税民であることを意味している。

27) 「ノヴゴロドの」(новгородскому) は *Ак* の固有読みで、*Сн*、*Км* にはない。なお、以下では *Ак* の興味ある固有読みの場合、これを訳して訳語に波線下線を付す。

28) 文脈から見て、高価な品物の貢税（貢納品）が集まったので受け取りに来るようにと、軍司令官を騙したのだろう。また、今後の貢税についての約定(мир)を結ぶことをほのめかしたことから、軍司令官自らが入城したと考えられる。

29) 「～をともなうて」(понявши/поимя/поемше с собою) 以下に異読があり、*Сн* *попа* *Иванка* *Легена*、*Км*、*Ак* *попа* *и* *Иванка* *Легена*/*Легеня*。前者の読み(*Н4*、*С1* も同じ)が本来であり、後者は、「司祭」の名に *Леген* という通称(あだ名)が付いているのは不自然と見て、「司祭」と「イヴァンコ・レゲン」を別人として解釈した改変によると考えられる。かれはおそらく、貴族(軍司令官)ヤドレイコに仕える聴罪司祭であり、*Иванко* (*Иоанн*) が聖職者としての名で、*Леген* が俗名(мирское имя)だったのでないか。なお、司祭が従軍して、使者や和議の誓約の立ち合い人として働くことは、当時は普通にあった。

30) 殉教聖女ヴァルヴァラの記念日は12月4日であり、その前日は、1193年12月3日に相当する。

31) 貢税の受け取りと運搬(上注28)のための追加人員が口実だっただろう。次の50人も同じ。

32) 「かれらにも同じことがなされた」(и с имъ то же сътвориша) は *Ак* のみの読みで、*Км*、*Сн* にはない。*Ак* 系統の伝播過程での挿入だろう。

その後³³⁾、サフカ³⁴⁾ (Савка) がユグラ人の候 (князь) に言った。「候よ、もしそなたがヤコブ・プロクシニチ³⁵⁾ (Яковец Прокшиниц) を殺さないで、かれを釈放してノヴゴロドへ生きたまま帰したなら (пустиши), この者〔ヤコフ〕はあなたに対して、候よ、再びここへ軍兵を率いて来るでしょう。そして、あなたの地を空っぽに (пусту) してしまうでしょう³⁶⁾」。候はヤコフ・プロクシニチ呼び出して、これを殺すよう命じた。そのとき、ヤコフはサフカに言った。「兄弟よ、神と聖ソフィアはそなたを裁くだろう。もし、そなたが、自分の兄弟を〔殺すように〕謀り事をなしたとすれば。そなたは、われらとともに神の前に立ち、われらの血に対する責任を負うことになるのだ」。かれ〔ヤコフ〕はこう言うと、殺されてしまった。このサフカ (Савица) は、ユグラの候と密かに結んで、裏切りをなしたのである。その後、〔ノヴゴロドの包囲軍は〕飢えに苦しんだ。かれらの巧言を真に受けて、〔城下に〕布陣すること6週間になったからである。そして、聖ニコライの記念日³⁷⁾ に〔ユグラ人は〕城砦から出撃

33) このゴシック体の段落については、ギッピウスは文体の研究から、*C_H* テキストに対する挿入であり、挿入は1199年8月のマルティーリイ死後間もなくなされた編集によると推定し [Гиппиус 1997: C. 25-26], その後時期を1220年代と訂正しているが [Гиппиус 20096], いずれにせよこれは疑問である。*C_H* の文が и потом 50. で唐突に途切れて不自然であること、ゴシック体部分とその上の部分には共通の言葉遊びが見られること (下注36) から見て、*H₁-M* (*K_m*, *A_k*) の読みが本来で、*H₁-C* (*C_H*) でゴシック体部分が削除されたと考えるべきである。さらに、1234年頃になされた *C_H* 写本の編集 (ノヴゴロド主教集成 (*HBC*) 原本からのユーリイ修道院のための写本転記) の際に、プロシカ (ヤコフの父親) の一族 (マルイシェフ一族) 関係の記事だけが一貫して削除された経緯があることから [Гимон 2001: C. 194], このヤコフのエピソードもまた同じときに *C_H* で削除された可能性が高い。

34) サフカ (Савка) は、ギリシア語名サヴァ (Савва; Σάββας) の通称形。ヤコフと同等の貴族 (боярин) で、リュージン区の出身者と考えられる。1194年記事に загореся Савькине дворе на Яршевеѡ улице とあり、かれの館がリュージン区のヤルシェヴァ通りにあったことが分かる。

35) 異同があり *K_m* Яковец Прокшиниц; *A_k* Яков Прокшинич. Яковец は Яков の指小的通称形で、Яков はギリシア語名 Иаков (Ἰάκωβος) の音訳語。なお、かれを、この遠征の軍司令官 Ядрейко (Ядреи) (上注22) と同一人物とする見解もあるが [Прозоровский 1877: C. 4][Таланин 2015: C. 54], もしそうであるなら、このエピソードの挿入者は Ядрейко の名を知っていながら、なぜ Яков という異なる名を取って示したのかの説明がつかない。やはり、異なる人物と見なすべきだろう。

このヤコフは、ネレフスキ区に拠点を置いていた貴族のいわゆるマルイシェフ一族 (Мальшевичи) に属し、かれの父は1199年記事に言及があり、1207年に没するプロクシャ・マルイシェヴィチ (Прокша альшевич) である。この一族はフーティン修道院と関わりが深いことから、ヤコフも総司令官ヤドレイコの配下の指揮官として働いていた可能性がある。その場合、この1193年の徴税遠征部隊の内部でのヤコフとサフカの内輪の諍いは、二人の拠点区 (ネレフスキ区とリュージン区) の間の諍いを反映したものかもしれない [Гимон 2001: C. 190-191]。

36) このサフカの言葉には、「帰す」(пустиши) と「空っぽにする」(пусту) が言葉遊びになっている。このような手法は、上の「集める」(копити) の言葉遊び (上注25) と共通であり、同じ記者の手になる部分であることが想定される。

37) この「聖ニコライの記念日」(на праздник Сятого Николы) とは、1193年12月6日にあたり「冬のニコライ」(Зимний Никла) と呼ばれる主要な祭日のひとつ。

して、〔包囲軍の〕全員を斬り殺した。

生き残った者たちにも、悲しみと災い³⁸⁾が襲った。80人の家臣しか生き残らなかったのだから³⁹⁾。冬の間ずっと⁴⁰⁾ノヴゴロドには、かれらについて、生きているのか死んでいるのか何の知らせもなかった。ノヴゴロドでは、公〔ヤロスラフ[D1153]〕と猊下〔大主教マルティリーイ〕とすべてのノヴゴロド〔の人々〕が悲しみに暮れていた⁴¹⁾。

《同じ年、ノヴゴロドで、ヤロスラフ[D1153]に息子ロスチスラフ⁴²⁾[D11532]が生まれた》

《同じ年、ジヴォグロド（Живоглод）の聖使徒教会⁴³⁾が丘⁴⁴⁾の上に、および慈悲深き聖ヨハネス教会⁴⁵⁾が復活修道院⁴⁶⁾の門上に、それぞれ木造りで建てられた》

38) 「悲しみと災い」(туга и бѣда)の表現は、6636(1128)年の飢饉の記事にもある〔ノヴゴロド第一年代記(5)：注164〕。

39) パシュートによれば、この遠征部隊は通常規模の400人ほど考えられるとのことであり〔Пшутто 1965: С. 122〕、その場合、遠征部隊のうち、93人が城内で殺され、227人ほどが城下での戦闘や行軍で死に、生き残ってノヴゴロドに帰還したが80人ということになる。

40) 1193/94年の冬のこと。

41) 次の年、6702(1194)年記事に、生き残った者たちの帰還（1194年8月頃）にかかわる記事がある。

42) ロスチスラフは夭折し、ノヴゴロドの聖ユーリイ修道院に埋葬された（下注139参照）。

43) この「聖使徒教会」(церковь сятую Апостолу)は、6700(1192)年記事で、落雷で焼けたと書かれている、「聖使徒ペトロとパウロ教会」(церковь святых Апостол Петра и Павла)のことで〔ノヴゴロド第一年代記(6)：注472〕、この教会が翌年のこの年（1193年）に木造りで(сърубиша)再建されたということ。ここでは、教会に「ジヴォグロドの」(Живоглод)という献堂者(ктитор, заказчик)の名の所有形容詞が付されている（この構文については〔Гиппиус 2017: С. 345-346〕〔Гимон 2014: С. 295〕を参照）。「ジヴォグロド」(Живоглод)の名は年代記ではこの箇所だけに記されており、貴族もしくは大商人だった可能性は高いが詳細は不明。

44) この「丘」(Холм)はスラヴェンスキイ区(Славенский конец)の南東部分を指し、かつて村落があった小高い土地の通称。

45) 「慈悲深き聖ヨハネス教会」(церковь святого Иоанна Милостиваго)は、7世紀のアレクサンドリア総主教イオアンネス四世(Ιωάννης ο Ελεήμων; †616年頃)に献じられた門上教会。門上教会(надвратная церковь)については〔ノヴゴロド第一年代記(6)：注98〕を参照。通常このタイプの聖堂は石造りの聖堂の門上に石造りで建てられるが、当時復活修道院の教会は木造りだったようであり(1196年に石造りに改修される)、そうすると「門上教会」も当然小さな木造りということになる。それが、1421-23年に石造りに建て替えられた(場所は移しただろう)ものが、「ミャチノの慈悲深き聖ヨハネス教会」(церковь Иоанна Милостиливого на Мячине)として現存している〔Великий Новгород 2009: С. 489〕。

46) 「復活修道院」(святого Вскресения)は、リュージン区から「外城(外周城市)」(окольный город)を出たミャチノ池のほとりのヴォスクレセンスカヤ街(Воскресенская улица)にあった女子修道院で石造り聖堂が現存している〔Великий Новгород 2009: С. 300〕〔ノヴゴロド第一年代記(6)：注475〕。6700(1192)年記事でこの復活修道院の典院の交替についての記事がСнにあることから、Снではこの修道院についての関心が深かったことが分かる。

6702 (1194) 年

【ノヴゴロドのリュージン区、ネレフスキ区、ラドガにおける大火：1194年6月5日～8月15日】

ノヴゴロドで火事があった⁴⁷⁾。諸聖人の主日⁴⁸⁾、精進に入った朝課の刻だった⁴⁹⁾。

ヤルィシェフ通りの (на Ярышевѣ улицѣ) サフカの館 (Савкине дворе) から出火した。火事は悪しき (зол) ものだった。3棟の教会が焼けた。それは、聖ヴァシーリイ教会⁵⁰⁾、聖三位一体教会、聖十字架拳栄教会⁵¹⁾ だった。多くの立派な家屋 [が焼けた]。そして、ルカ通りで火勢が鎮まった。

われらの罪に対する悪しき出来事はそこで止まなかった。翌日にはチグロフ小路で (в Чегловѣ улкѣ) 出火した。そして、10棟の館が焼けた。その後、再び、より悪しきことが勃発した。その週の金曜日の商売の時間に、フレフコフ通りで (на Хревковѣ улицѣ) 出火し、[火勢が] ネレフスキ区まで、小川のところまで至った。7棟の教会が焼けた。大きな家屋も [焼けた]。

そして、その時から悪しき事が立ち上がった。日を選ばず常に、知らないうちに六つかそれ以上の場所で出火した。再びこれに対して、人々は家屋の中に留まるわけにはいかず、野原で暮らしていた。そして、その後に城塞区 (Городище) も焼けた。

同じ年には、ノヴゴロドより早い時期にラドガ (Ладога) が焼けた。その後にルーサ (Руса) も焼けた。その後に、リュージン区では10棟の館が焼けた。そのような罰があった。それは、諸聖人の日から女宰の日⁵²⁾ (Госпожин днь) までのことだった⁵³⁾。

47) 「火事があった」は *Сн, Км зажьжесея пожарь, Ак Бысть пожарь* の異読がある。前者が本来の読みだろう。

48) 「諸聖人の主日」(в недѣлю на Всѣх святых) は移動祭日で、五旬祭 (Пятидесятница) 後の第1週目の日曜日で、ペトロの斎 (聖使徒斎) の前日 (заговенье на Петров пост) に相当する。1194年の「諸聖人の主日」は、6月5日に当たっている。

49) この句には三写本には次の異読がある。*Сн в говѣние идуче въ заутрнюю, Км в говѣние, в заутрении год, Ак въ заутренее врѣмя*。なお早課 (заутрення) は現在の午前3時頃から日の出の時刻までの間に行う奉事のことで、この場合は、現在の時刻で6月6日の深夜から日の出 (午前4時頃) にかけての時間帯にあたり、ペトロの斎 (Петров пост) に入ったばかりの時刻である。

50) リュージン区のヤルィシェフ通りにあった木造教会。1151年記事に火災の記事がある [ノヴゴロド第一年代記 (5): 注419]。

51) 「聖十字架拳栄教会」(святое Въздвижение) はここが初出。

52) 「女宰の日」(госпожин днь) は、女宰 (Госпожа)、すなわち聖母に関連する祭日を意味するが、ここでは8月15日の「聖母就寝祭」(Успение пресвятой Богородицы) のことを指している。

53) ノヴゴロドの大火は、1194年6月5日～8月15日の71日のあいだ断続的に続いたことになる。

【ユグラ遠征の生存者たちの帰国：1194年：8月頃】

その時、ユグラから生き残った者たちが帰還した。スプイシカ・ヴォロソヴィチ（Събышка Волосовиц）とザヴィド・ネゴチェヴィチ（Негочевиц Завида）とモイスラフ・ポポヴィチ（Моисла Попович）は、〔遠征部隊に〕同行した仲間の手で殺された。他に金を払って自ら身受けした者たちもいた。これらのことを為した者たちは、自分の兄弟たちに敵対する謀議をユグラ〔人〕と行っていたのだから。このことは、神が裁くであろう。

同じ年、ヌートナヤ街に聖使徒ピリポ教会が建てられた⁵⁴⁾。マルティーリイ（Мантурии）猊下がこれを献堂した。〔1195年〕1月29日だった。《聖イグナチオスの聖骸改葬の記念日だった》。ラドスラフ・ダニールヴィチ⁵⁵⁾。

同じ年、ノヴゴロドの管長ディオニーシイが逝去した。聖ユーリイ〔修道院〕の典院だった。かれの職位にサヴァーチイが任命された。

《その冬、アルカージイの聖なる聖母修道院の典院ゲラシムが逝去した。かれの職位に司祭のパンクラティ⁵⁶⁾が任命された》

6703（1195）年

神を愛するノヴゴロド大主教マルティーリイ（Мантурии）は、〔内城〕城門の上に石造りの

54) ヌートナヤ街（Нутная улица）はスラヴェンスキイ区を東西に走る通り（НЗには на Торговой стороне, на Знаменской, въ Славенскомъ концѣ の補足がある）。聖ピリポ教会（церковь святого апостола Филопа）は、その中程、バルドヴァ街と交差するあたりにあった教区教会で、三度目の火災の後、1383-84年に石造りに建て換えられ、16世紀には同じ土台の上に「ニコライ教会」が併設されている [Великий Новгород 2009: С. 516-517]。

55) Км, Ак のみに Радославъ Даниловиць/Даниловичъ の人名が前後の構文的脈絡なしで記されている。おそらくは、「献堂した」（святи/свяща）の動詞の主語として、「猊下マルティーリイ」（владыка Мантурии）と同格の語を、Сн（おそらく本来の読み）の на святого Игнатия переселение мощьмъ を削除した上で、文の最後に挿入したものと考えられる。ただ、俗人が「献堂」（献堂式で聖堂を聖別する）するのは不自然であることから、その前の「建てた」（поставиша）の実質的な主語として理解するのが妥当だろう。すなわち、聖堂建築の発注者、資金提供者として名前が追加されたものだろう。Радославъ Даниловиць は父称が付されていることから見て貴族か上級商人と思われる。

56) 「司祭のパンクラティ」（Панькратии попин Сн）は、ギリシア語名 Панкратий; Παύκράτιος の音訳人名。попин は поп と同じで、修道院の受胎告知教会の司祭を務めていた修道司祭のことだろう。

教会を定礎した。〔その教会は〕ハルコブラテиа⁵⁷⁾の聖なる聖母の尊い衣と帯の安置⁵⁸⁾に奉献されたものだった。〔建築は〕〔1195年〕5月4日《の聖イサーキオスの日》に始まり、8月2日《のステファノスの日》に終わった⁵⁹⁾。

そして、猊下は自らこの〔教会〕の献堂式を行った。聖なる聖母の帯の記念日⁶⁰⁾だった。これは、キリスト教徒にとっては避難所であり⁶¹⁾、信徒にとっては喜びと楽しみだった。

同じ年の秋、ノヴゴロドの大主教マルティーリイ（Мантурѣи）が、修道院の聖なる復活⁶²⁾石造りの教会を定礎した。《そして、〔翌年の〕秋になるまでには、扉を残して周り全体が出来上がった⁶³⁾》。

《その年、聖ヴァルヴァラ〔修道院の典院〕神の僕フリスチナ（Хрьста）が逝去した⁶⁴⁾。かの女の職位に〔後任が〕任じられた。猊下〔大主教マルティーリイ〕とすべての修道女は、温

57) 「ハルコブラテиа」(Халкопратія; Χαλκοπρατεία)はコンスタンティノポリスの地区の名前で、ハギア・ソフィアの北西に隣接していた。ここの聖母教会には、聖母の衣と帯が安置されており、正教世界では、8月31日が帯の安置の記念日、12月29日が衣の安置の記念日とされていた。

58) 「聖なる聖母の尊い衣と帯の安置」(святая Богородица Положение честнаго ризы и пояса)は、聖母の祝祭日で、衣(риза)と帯(пояс)の安置でそれぞれ記念日があるが、この教会は「帯の安置」(Положение пояса)に奉献され、8月31日が記念日である(前注)。6世紀のユスティニアヌス二世(565-78)の治世に、ジレ(Зила, Ζήλα)にあった聖母の帯をコンスタンティノポリスへ運んで、ハルコブラテиаの聖母教会に安置したのが祝祭の歴史的な起源とされている。「聖帯安置教会」(церковь Ризоположения, Ризоположенская церковь)という名称もある。

59) これは、90日で建築が完成した計算になる。

60) 1195年8月31日に相当する。上注57, 58を参照。

61) この「キリスト教徒にとって避難所」(крестияномъ прибѣжище)の表現は、1153年、1179年、1192年の記事にもあり、1179年記事は建築の開始日と終了日が示されていることが共通しており、1192年記事は同じマルティーリイ(当時は典院)が開いた教会であることが共通している。

62) 「修道院の聖なる復活教会」(церковь...святого Въскресения в монастырь)は、ソフィア地区リュージン区(Людинконец)の土塁近く、ミャチノ池のほとりの女子修道院の教会のこと。1136年記事に、まったく同じ表現で、木造の聖堂が焼失したことが記されている〔ノヴゴロド第一年代記(5): 注272〕。また、1192年記事にはこの修道院の典院の交替の記事がある〔ノヴゴロド第一年代記(6): 注475〕。

63) この文言はСнのみで、この復活修道院に関わりの深い年代記記者(上注46)の手になるもの。石材を積み重ねて、木製の扉(дверь)を除いて建物の外郭を組み上げたということで、「秋になるまで」は翌年の秋のことで、1196年9月13日に献堂式が行われていることから、秋は8月～9月初めのことを言っているか。

64) このリュージン区の聖ヴァルヴァラ女子修道院の典院の交替については、1167年記事(Снのみ)にあり、この時は、マリミヤナ(Марьямяна)が典院となっていた。「フリスチナ」(Хрьста)はおそらく、かの女の後任の典院だったのだろう。

順で謙抑なヴァルヴァラという名のユーリイ・オレクシニチの（Гюргевая Олексиниця）妻を選んだ。そして、〔大主教は〕聖エウフェミアの公会議記念日に⁶⁵⁾、かの女を〔典院に〕任じた。》

《その年、聖なる十字架拳栄教会⁶⁶⁾と聖ヴァシーリイ教会⁶⁷⁾とノズドリチ（Ноздрьц）のドミトリオス教会⁶⁸⁾を木造で新しく建てた》

同じ年の冬〔1195/96年冬〕、フセヴォロド[D177:K]はノヴゴロド人たちを〔スーズダリへと〕呼び出した。チェルニゴフに対して、ヤロスラフ⁶⁹⁾ [C412]に対して、すべてのオレーグ[C4]一族（Олгово племя）に対して敵対するためだった。

ノヴゴロド人は、かれ〔フセヴォロド〕を拒絶しなかった。〔ノヴゴロドの〕竈役たち、平従士たち（гридьба）、商人たち（купць）は、ヤロスラフ公[D1153]と一緒に〔スーズダリへ向けて〕出発した。かれらは、ノーヴィ・トルグに滞在していた。そこに、フセヴォロド[D177:K]が使者を派遣して、〔かれは〕かれら〔ノヴゴロドの使節団〕を名誉をもって帰郷させた。

そして、ノヴゴロド人たちはかれ〔フセヴォロド公〕のところに、市長官のミロシカ⁷⁰⁾ [A-31]（Мирожку）とボリス・ジロ斯拉ヴィチ⁷¹⁾（Борис Жирославиц）と百人長ニキフォル⁷²⁾

65) 「聖エウフェミアの公会議記念日に」(на сборъ святыя Еуфимие) とは、1195 年 7 月 11 日にあたり、4 世紀初頭の大殉教聖女エウフェミア（Евфимия; Εὐφημία）に捧げられた聖堂において、451 年の第 4 回カルケドン公会議のときに起こった奇蹟の記念日を指している。

66) 1194 年の大火で焼けたヤリシシェフ通りの聖堂（上注 51）を木造で（сърубиша）再建したということ。

67) 前注と同様に、1194 年の大火で焼けたヤリシシェフ通りの聖堂（上注 50）を木造で（сърубиша）再建したということ。

68) 「ノズドリチの聖ドミトリオス教会（святой Дмитрии Ноздрьц）」についてはここが初出。文脈から見て、1194 年の大火で焼失した聖堂と思われる。ヤーニンによれば、ノズドリチは、1118 年に民衆に強奪されたネレフスキ区（район）の貴族「ノズドリチ」（Ноздрьч）〔ノヴゴロド第一年代記（5）：126〕のことであり、ドミトリオス教会もこの区のダニスラフ街（Даньславля улица）にあったと推定している〔Янин 2003: С. 102〕。

69) これは、当時のチェルニゴフ公ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [C412] のこと。

70) 市長官「ミロシカ」（Мирожка）[A-31] については、〔ノヴゴロド第一年代記（6）：注 450〕を参照。

71) この「ボリス」は、1175 年に最後の市長官を務めたジロ斯拉フ（Жирослав）[A-27] の息子だろう。ジロ斯拉フはヴラジミル公アンドレイ [D173] に近かったことから〔ノヴゴロド第一年代記（6）：注 204, 246〕、スーズダリ派の代表的な貴族の一門として使節団に加わったと思われる。

72) 「百人長」（сочький）は、千人長（тысяцкий）のもとで、市民軍（вои）を組織するなど軍事を管掌していた官職で、記名の並びを見ると市長官の配下で指示を受けていただろう。主に貴族（бояре）身分のものが就いていたと考えられる。

(Микифор)を派遣した。かれらは、〔フセヴォロドの〕息子⁷³⁾を〔ノヴゴロド公として〕求め、ヤロスラフ[D1153]に対する不満を述べた。そして、**城市**⁷⁴⁾に帰還した。

同じ年の冬〔1195/96年冬〕、スモレンスク人がチェルニゴフ人と戦った⁷⁵⁾。神はチェルニゴフ人を助けた。ボリス・ロマノヴィチ公⁷⁶⁾[J12]が捕虜になったのである。かれらの間では和議は結ばれなかった⁷⁷⁾。

73) 当時フセヴォロドには四人の「息子」がいたが、コンスタンティン[K1]は9歳(1186年誕生)、ユーリイ[K3]は8歳(1187年誕生)、ヤロスラフ[K4]は4歳(1191年誕生)、ウラジーミル[K5]は1歳(1194年誕生)だった。どの息子であってもまったくの少年である。ノヴゴロドの使節団(ミロシカ)が、フセヴォロドとの確執を避けながら、ヤロスラフ[D1153]を排除して、自らのイニシアティブによるノヴゴロド統治を狙ったことは明らかである。

74) 異読があり、*Км/Ак въ город/град, Сн въ Новъгородъ*。おそらく後者が本来の読みだろう。ここで、ことさらにノヴゴロド使節団が帰還した(възвратишася)事実に触れているのは、使節団の主要なメンバーである市長官ミロシカとボリス、イヴァンコとフォマが帰還できなかった(フセヴォロドによって「留め置かれた」)(下注79)こととの対比で、かれら以外の使節たち(例えば百人長ニキフォル)は帰還することができたと言っているのではないか。

75) 『キエフ年代記』6703(1195)年の記事に戦いの詳しい経緯が記されている。それによると、1196年3月にチェルニゴフ公ヤロスラフ[C412]は、当時のキエフ公リューリク[J2]に対する約定に違反して、ヴィテブスクにいたダヴィド[J3](スモレンスク勢)を討つべくオレーグ[G5]をはじめとする甥たちの部隊を派遣し、遠征隊は道中でスモレンスク領を掠奪した。これに対して、ダヴィド[J3]は、甥のボリス＝ムスチスラフ[J12]等をスモレンスク人とともに派遣して迎え撃たせた。3月12日に両軍は遭遇して白兵戦になったが、スモレンスク軍の側にいたボロツク人が裏切って、ボリス＝ムスチスラフ[J12]を背後から攻撃して、かれを捕虜に捕ってしまった。スモレンスク勢は首領を失ったことから、スモレンスクのダヴィド[J3]のもとに帰り、チェルニゴフ勢は次の戦いを準備するべく、チェルニゴフのヤロスラフ[C412]のもとに帰還した[ПСРЛ Т. 2: Стб. 691-692]。

他方『スーズダリ年代記』では、フセヴォロド大巢公と同盟していたダヴィド公の視点から、次のように記されている。「その年の冬〔1195/96年冬〕、ダヴィド[J3]は、自分の甥で大いなる公フセヴォロド[D177:K]の姻戚であるムスチスラフ[J12]をスモレンスクから派遣した。ヴィテブスクへ行って自分の婿〔ヴァシリコ〕を助けさせるためだった。〔ところが〕、ヴァシリコ[L2221]はチェルニゴフ人を率いて、かれ〔ムスチスラフ[J12]〕を撃ち破ったのである。公の姻戚であるムスチスラフ[J12]は捕らえられて、かれはチェルニゴフへ連行された」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 413]。ここには、ヴァシリコ(ボロツク人)の裏切りが強調されている。

76) この「ボリス・ロマノヴィチ公」(князь Борис Романович)は、ムスチスラフ・ロマノヴィチ老公[J12]のことで、ここではかれの洗礼名である「ボリス」が使われている。当時は、スモレンスクにおり、チェルニゴフ勢との戦いのスモレンスク側の部隊の総指揮官にあたっていた(前注)。このときかれは、フセヴォロド大巢公[D177:K]およびかれと同盟していたダヴィド[J3]の陣営に属していた。

77) 記事の物語の流れから見るとこの段落は異質な記事の「挿入」のように見える。しかし、フセヴォロド大巢公は同盟者ダヴィド[J3](スモレンスク勢)の「敗戦」(前注)を受けて、ノヴゴロドから使節団を帰国させず留め置いて、チェルニゴフ勢との戦争にノヴゴロド人を動員しようとしたという文脈の中では、この「挿入」も理解できる。なお、「かれらの間では和議が結ばれなかった」(не бяхе мира между ними)の表現は以下でも繰り返されるが、戦争状態が続いていることを意味している。

そして、フセヴォロド[D177:K]は市長官ミロシカ[A-31], ボリス〔・ジロ斯拉ヴィチ〕, イヴァンコ, フォマを留め置いた⁷⁸⁾。そして、かれらをノヴゴロドへ帰さなかった⁷⁹⁾。

そして、〔フセヴォロド大巢公〕自身はボロヴェツ人のところに〔傭兵を求める〕使者を派遣した。こうして、フセヴォロド[D177:K]とダヴィド⁸⁰⁾ [J3]は自分のもとに軍兵を集めた⁸¹⁾。他方、チェルニゴフのヤロスラフ[C412]とイーゴリ[C432]も、兄弟たちとともに〔軍兵を集めた〕。かれらの間では和議は結ばれなかった。かれら〔両陣営〕はより大きな戦争を起した。

6704 (1196) 年

兄弟であるコンスタンティンとドミートリイ⁸²⁾の二人（Костянтин и Дмитръ, братеника）が、

78) これは、ヤロスラフ[D1153]の公座からの排除とフセヴォロドの「息子」の受け入れを請願した（上注74）ノヴゴロド使節団の主要メンバーのこと。ミロシカとボリスの名はすでに言及されているが、「イヴァンコとフォマ」（Иванко и Фома）も有力貴族ではないか。おそらく、かれらの下には幾らかの兵士がいたに違いない。フセヴォロド大巢公[D177:K]が、市長官ミロシカを初め使節団の中の主要メンバーを「留め置いた」のは、以下の進展で分かるように、かれらのヤロスラフ[D1153]排除の動きを阻止して、ヤロスラフとノヴゴロド人を、対チェルニゴフ＝スモレンスク勢遠征に参加させるようとしたのではないか。

79) 以下の6705(1197)年の項に市長官ミロシカが釈放されて帰郷した記事があり「2年間〔獄中に〕居た」とある（下注125）。帰郷が1198年1月11日だから、かりに丸2年間スーズダリ＝ヴラジミルに監禁されていたとすれば、かれらが「留め置かれた」のは1196年1月頃の計算になる。これは、本記事の配列の時系列（6703年の項の末尾に置かれている）ともほぼ一致していることから、1196年1月頃に捕らええたと考えてよいだろう。

80) ダヴィド[J3]は当時スモレンスク公であり、チェルニゴフ勢（オレーグ一族）と直接対立しており、フセヴォロド大巢公とは同盟を結んでいた。

81) 対応の『スーズダリ年代記』には、「そして、〔フセヴォロド[D177:K]は〕冬の間は待機していた」（ту зиму перестряпъ）[ПСРЛ Т. 1: Стб. 413]とあり、スモレンスク勢の「敗戦」後の1196年3月～夏の間の「待機」期間にフセヴォロドは戦争の準備をしていたことが分かる。

82) 「兄弟であるコンスタンティンとドミートリイ」はすべての写本でКостянтин и Дмитръ, братеникаと表記されており、文脈からこの二人が献堂者（кѣтитор）で資金提供者（заказчик）であると推定される。そこから、二人は上流階層の貴族もしくは大商人だったと考えられる。なお、H3 1196年記事には、この二人について、да посадники Константин да Дмитрий Корованковичиと記されているが、同時代の市長官（посадники）関連の史料にКостянтин и Дмитръの名はないことから、17世紀のH3編者の伝聞による挿入だろう。Корованковичиの父称についても、市長官関係の史料にはこの名はない。

ネレゼニ⁸³⁾〔中州〕(Нелѣзень)の修道院に石造りの聖キュリロス教会⁸⁴⁾(святѣи Кирил)を定礎した。職人はルービヤニイ街⁸⁵⁾のコロフ・ヤコヴィチ(Коровъ Якович)だった⁸⁶⁾。

そして⁸⁷⁾建設を始めたのは4月のことだった。終えたのは《7月8日》⁸⁸⁾の聖プロコピオス⁸⁹⁾の記念日だった⁹⁰⁾。マルティーリイ猊下がこれ〔教会〕を献堂した。〔1197年〕1月12日のことだった(《冬のこと, 1月19日の, 聖タチアナの日のことだった⁹¹⁾。典院アニシム⁹²⁾の時だっ

83) 「ネレゼニ」(Нелѣзень)は、ノヴゴロド内城から西南西 6.8km ほどのヴォルホフ川右岸支流小ヴォルホヴェツ川(Малый Волховец)の中州の歴史的地名で、現在の Кириловское сельцо に相当している。Нелѣзень, Селезнев などと呼ばれたこともあった。

84) これは、石造りの聖堂を建てて修道院を開基したということ。「キリル」(Кирилл)は5世紀前半のアレクサンドリア主教聖キュリロス(Кирилл Александрийский; Κύριλλος Ἀλεξανδρείας)のことで、かれに奉献した修道院。11-12世紀の聖人暦では4世紀のアレクサンドリア主教聖アタナシオス(Афанасий Александрийский)と一緒に記念され、祝祭日は1月18日だった。聖堂は20世紀に完全に破壊されて、現存していない[Великий Новгород 2009: С. 315]。

85) 「ルービヤニツァ街」は商業地区(Торговая сторона)のスラヴェンスキイ区(Славенский конец)を東西に走る通り。本文はどの写本も Лубяня улица だが、Лубяница(Лубянка)が標準形になっている。現在の Пушкинская улица に部分的に相当する。地名の由来は、луб(樹皮や麻の韌皮)を加工する職人が住んでいたことからきている。なお、モスクワ中心地の有名な地名 Лубянка は、15世紀にこの地の住民がイヴァン三世の手で強制移住させられて住み着いたことから、故郷にちなんで付けられたものの。

86) *Км, Ак (Н1-М)* А мастеръ бѣше Коровъ Якович (Яковличъ) с Лубяньи улицѣ; *Сн (Н1-С)* на Лубяньи улицы と異読がある。*Н1-М*と*Н1-С*では誰が「ルービヤニツァ街」の住人であったか異なる意味になってしまう。どちらが先行する読みであるか判断が難しいが、ここでは「コンスタンティンとドミートリイ兄弟」も「職人のコロフ」も、双方ともルービヤニツァ街の住人だったと解釈しておきたい。

87) 以下の段落の記事は明らかに後代の挿入によるもの。マルティーリイを「猊下」(владыка)と呼び、建設を讃える内容の共通性から見て、かれの死後(1199年8月以降)になされた挿入(下注105)の可能性がある。キュリロス教会の献堂式については、以下の6704(1196)年の最後の位置(時系列的には正しい位置)に記されており(下注117)、この段落の記事は内容的には教会の定礎と献堂に対する補足説明になっている。

88) 建築終了の日付には異読があり、*Км, Ак* иуния/июня въ 8; *Сн* июля въ 8 とある。プロコピオスの記念日はスラヴ語聖人暦では7月8日であることから(次注)後者が正しく、前者の「6月8日」は何らかの誤記が伝わった結果と考えられる。ここでは*Н1-С*(*Сн*)の読みを訳した。

89) 「プロコピオス」(Прокопий Кесарийский; Προκόπιος ο Καισαρεύς)はカエサリアの殉教聖人(великомученик)で、正教では303年の死没した日付7月8日を記念日としている。

90) 建築開始の日付が示されていないが、68日～98日の建設期間になり、これは1179年の石造りの受胎告知教会の建設期間96日(70日?)とほぼ匹敵している[ノヴゴロド第一年代記(6):注301]。

91) 「タチアナ」は3世紀のローマの殉教聖女タチアナ(Татиана; Tatiana; Τατιανή)でスラヴ典礼暦では1月12日が祝祭日である。そのことから、*Н1-М*(*Км, Ак*)の編者は、*Сн*の日付19を12に訂正した上で、記念日は省いて記したと考えられる(下注95参照)。

92) 「典院アニシム」(игумен Онисим)は、このキリル修道院の初代の修道院長(典院)の名ということになるだろう。

た》⁹³⁾。〔この教会は〕キリスト教徒にとっては喜びであり、コンスタンティンとドミートリイにとっては永遠の記憶になった⁹⁴⁾。

同じ年大主教マルティーリイが聖なる聖母〔教会〕の門上教会⁹⁵⁾に〔壁画を〕描かせた。《描いたのはグレチン・ペトロヴィチ⁹⁶⁾（Гръцинъ Петровиць）だった》。

同じ年、聖なる復活教会⁹⁷⁾〔の建築が〕終わった。猓下⁹⁸⁾マルティーリイがその献堂式を行った。9月13日だった。《聖コルネリオスの記念日⁹⁹⁾、聖十字架挙栄祭の前日¹⁰⁰⁾》だった。典院のと

93) 献堂式の日付については異読があり、*Км, Ак* генваря въ 12 と簡単なものに対して、*Сн* は на зиму мѣсяця генваря въ 19, на святыхъ Татияны, при игумене Онисиме と対応の文言が長く、日付も異なっている。1月18日が聖堂の守護聖人である聖キュリロスとアタナシオスの祝祭日であり（上注86）、また1197年はその翌日が儀式に相応しい日曜日に当たっていることから、1月19日の日曜日に献堂式が行われたとするのが史実に近いだろう。*Км, Ак* および *Сн* の読みには、それぞれに誤りが含まれているのである。

94) 原文は а Костянтину и Дмитру вѣчная память で、コンスタンティンとドミートリイの冥福を祈る場所になったということ。「永遠の記憶」（вечная память）は埋葬式に歌われるパニヒダ（永眠者記憶祈祷）からきている。この文言によって、この段落が挿入された時点で（1199年8月以降：上注89）、二人が物故していたことが分かる。

95) この「聖なる聖母の門上教会」（церковь на воротех... святыхъ Богородица）については、ノヴゴロドに聖母に奉献した教会は多くあるが、その中で「門上教会」であるのは、6703(1195)年記事で、大主教マルティーリイ自身が1195年8月31日に献堂式を行った、内城の城門上の「聖帯安置教会」（церковь Ризоположения）（上注58）だけであり、明らかにこの教会を指している。

96) この「グレチン・ペトロヴィチ」（Гръчинъ Петровиць）についての記述は *Сн* のみの読みで *Км, Ак* にはない。この絵師については、白樺文書にあらわれる Олисеи Гръчин という絵師（リュージン区チェルニツァ通り在住）と同一人物であり、1180-90年代に公との共同裁判に関与していた人物でもあることはほぼ間違いない（上注13）。リュージン区の有力貴族ピョートル・ミハルコヴィチ（Петр（Петрок） Михалкович）[В-12]の息子である可能性が高い。この「グレチン」（гръчин）は「ギリシア人」ではなく、「ギリシア通」くらいの意味のあだ名だろう。なお、*Н1-М*にこの絵師についての記述がないのは、*Н1-М*編集過程における削除による可能性が高い。

97) 「聖なる復活教会」（церковь святого Въскресения）はリュージン区的女子修道院の主教会。1195年の秋に大主教マルティーリイによって定礎式が行われている（上注62）。

98) 異読があり、*Км* архиепископъ, *Ак* самъ владыка, *Сн* владыка。 *Сн* ⇒ *Ак* ⇒ *Км* の順番で改変が推移していったか。владыка（猓下）は主教に対しての呼びかけ語で、親近感がこもった表現である。

99) 聖コルネリオス（святыхъ Корнилии）は、新約『使徒行伝』10章に登場し、使徒パウロの手でキリスト教徒になったカイサリアの百卒長「コルネリオス」（Κορνήλιος ἑκατοντάρχης; Cornelius, centurio）のことで、正教暦による記念日は9月13日。

100) 「十字架挙栄祭の前日」（на канонъ святого Въздвижения）とは、十字架挙栄祭（Воздвижение честнаго и животворящего Креста）が固定祭日で9月14日なので、別の表現に言い換えていることになる。

きだった¹⁰¹⁾》

現下〔マルティーリイ〕は、苦勞を重ね、昼には酷暑に苦しみ、夜には悩み悲しんでいた。それは、何とかして〔この建設を〕終えて、完成した、〔壁画で〕飾られた〔聖堂を〕見るためであった。このことを望んで〔果たした〕〔マルティーリイは〕、天の王国を、終わりなき喜びを永遠に受け容れた¹⁰²⁾のである。《アミン》¹⁰³⁾

その年が終わろうとしていた時、ノヴゴロド人はフセヴォロド[D177:K]のもとに使者を派遣した¹⁰⁴⁾。それは、市長官ミロシカ、およびイヴァンコ、フォマ〔の釈放を求める〕ためだった。なぜなら、〔フセヴォロドは〕ボリスを他の人士たちと一緒にすでに釈放していたのだから¹⁰⁵⁾。

ところが、フセヴォロド[D177:K]はチェルニゴフへの遠征の途上だった。かれは自らの軍勢を集め、ポロヴェツ人の軍勢を引き入れていた。そして、〔フセヴォロドは〕自軍とともに、ノヴゴロド市長官ミロシカ、イヴァンコ、フォマを〔遠征に〕連れて行ったのである。

他方、〔フセヴォロドは〕ノヴゴロド人に対して、ルーキ（Луки）を攻めるために遠征するよう命令した。〔ノヴゴロド人たちは〕ヤロスラフ[D1153]とともに〔ルーキへ向けて〕遠征した。

101) 「典院のときだった」の原文は при игумени で本来ならこの後に人名が入るところ。Сн 写本で何らかの理由で、書き込みを忘れたと考えられる。

102) 「天の王国を、終わりなき喜びを永遠に受け容れた」(прия царство небесное и радость несконцаему в вѣки) は、死んで天国に迎え入れられたということ。マルティーリイの死については次注参照。

103) この段落は、Сн に аминь の語があり、呼びかけ語の владыка が主語となっていることなどから、全体として大主教マルティーリイの事績を讃える一種の祈祷文であり、かれの事績としては直前の復活教会の完成（「完成した」(церковь свершена)）とその前のグレチンの壁画（「飾られた」церковь... украшена）とを参照している。内容から見てかれの死後（1199年8月24日死没）に書かれ、年代記記事に追加されたものと考えられる。なお、同様の文言を 6706 (1198) 年記事でも見ることができる（下注 135）。

104) この記事は 6704 年の年紀にあるが、「その年が終わろうとしていた時」(тому же лѣту исходящу) の「その年」(то лѣто) は、以下の記事の時系列から判断して、前年の 6703 年を指していると考えられる。6703 年は 1195 年 3 月～1196 年 2 月の期間を指していることから、この年が終わろうとしていた時とは、1196 年 2 月頃になる。つまり、1196 年 1 月頃に（上注 80）市長官ミロシカ等が「留め置かれた」ことが伝わるとすぐに、ノヴゴロド行政府、民会は、かれらの釈放を嘆願する使節を派遣したことになる。

105) 「ボリスを他の人士たちと一緒に釈放したのだから」(пустилъ бо бяше Бориса и инѣи с нимъ) は、直前の文（前注）で三人の名しか挙がっていないことについての説明になっている。フセヴォロドがスーズダリに留め置いた四人のうち、ボリス・ジロスラヴィチとその配下の者たちは、まもなく釈放されて、1196 年 2 月頃にはノヴゴロドにすでに帰国していたということだろう。

そして、ルーキで（на Луках）布陣をしたが、また再び帰郷した。

そこで、フセヴォロド[D177:K]はかれら〔ノヴゴロド人〕の地へと侵入した。しかしながら、神はかれらの間に大きな流血を起こさせなかった。そして〔両者は〕お互いの間で和を結んだ。

一方、ノヴゴロドは、すべての公たちを釈放して自由にした。かれら〔ノヴゴロド人〕は自分たちが好む場所で自由に〔その〕公を捕らえて〔捕虜にして〕いたのである。

フセヴォロド[D177:K]は〔スーズダリへと〕帰郷した。そして、フォマを釈放してノヴゴロドへ行かせた。他方で、ミロシカとイヴァンコは釈放しなかった。〔それゆえに、フセヴォロドは〕ノヴゴロド人を怒らせた。

ノヴゴロド人たちは評議すると、《道を示して》ヤロスラフ公[D1153]をノヴゴロドから追放した。秋のユーリイの日のことだった¹⁰⁶⁾。

その後再び、ヤロスラフ[D1153]はノーヴィ・トルグを攻めるべく遠征していた。ノーヴィ・トルグ人（новоторжци）は、かれに拝礼して¹⁰⁷⁾〔支配公として〕受け入れた。ノヴゴロドにおいては、善良な者たちはかれのことを気の毒だと思い、悪意の者たちは喜んでいた。

〔ノヴゴロド人は〕再び、ヤロスラフ公[C412]のもと、チェルニゴフへ使者を遣って、かれのもとにいる息子¹⁰⁸⁾〔ヤロポルク[C4122]〕を〔公として派遣するよう〕求めた。〔ノヴゴロド人〕自らは、冬の間ずっと¹⁰⁹⁾ 公が不在の状態だった。

一方、ヤロスラフ[D1153]は、自らの所領であるトルジョク〔ノーヴィ・トルグ〕に公として座していた。そして、すべての所領で¹¹⁰⁾ 貢税を取っていた。〔すなわち〕ヴェルフとムスタ

106) 「秋のユーリイの日」(на осенний Юрьевъ день) は、ここでは、1196年11月26日に相当する。これは、「聖ゲオルギオス」(Святой Георгий; Ἅγιος Γεώργιος) の祝祭日で、Георгий の民間の通称 Юрий から来ている。ユーリイを記念する日は、4月23日と11月26日の年に二年度あり、前者を「春のユーリイの日」、後者を「秋のユーリイの日」と呼ぶことがある。

107) 「拝礼して」(с поклономъ) は、抵抗せずに屈服することを表す儀礼的身振り。

108) 以下の記事によると、この求められた「息子」(сынъ) は、ヤロポルク・ヤロスラヴィチ[C4122]のことを指している。

109) この「冬の間ずっと」(всю зиму) とは、1196年11月26日～1197年3月の期間を指している。

110) 「すべての所領で」は異読があり、*Км во всей волости*; *Ак въ своей волости*; *Сн по всему*。おそらく、*Сн* ⇒ *Км* ⇒ *Ак* と読みが変遷したと考えられる。*Ак въ своей волости* (自分の所領で) は二次的な読み。

川沿岸地帯¹¹¹⁾、およびヴォロクを越えた〔地方〕¹¹²⁾で貢税を取った。

一方、フセヴォロド[D177:K]は、ヴォロクを越えた〔地方〕および自分のすべての地で、ノヴゴロド人¹¹³⁾を捕まえた。そして、自分のもとに留め置いて、かれらを釈放せず、ノヴゴロドへ行かせなかった。〔留め置かれたノヴゴロド人は〕ヴラジミルの城内を自由に歩いていた¹¹⁴⁾。

同じ年の冬、大主教マルティーリイはネレゼニで (в Нелѣзене) 《聖キュリロス》教会を献堂〔聖別〕した¹¹⁵⁾。

6705 (1197) 年

チェルニゴフからノヴゴロドへ、公のヤロ波尔ク・ヤロスラヴィチ[C4122]が、やって来た。3月の聖枝祭の主日¹¹⁶⁾ (на верьбницу) のことだった。かれは、〔ノヴゴロド公の公座に〕《シ

111) 「ヴェルフとムスタ川沿岸地帯」は異読があり *Км по Верху, Мьстѣ; Ак по Верхъ, Мстѣ; Сн по всему Върху и Мьсте*。この ヴェルフ (Верх/Върх) は普通名詞では、河川の上流域を指すが、ここでは、固有名詞「ムスタ」と並行して使われていることから、固有の地名を指していると考えられる。文脈から見て、ムスタ川の上流域とそれにトルジョクまでを結んだトヴェルツァ川上流域から東側の一帯で、現在 Бежецкий Верх と呼ばれている シチ (Сить) 川とモロガ (Молога) 川の上流域を指しているのではないかと。この地域は、のちに Бежецкая пятинa と呼ばれたノヴゴロドの行政区域にほぼ相当する。なお、モロガ川をさらに東へ進み Шексна (Шексна) 川流域を越えると、ザヴォロチエ地方 (次注) になる。

112) 「ヴォロクを越えた」(за Волокомъ) は、6677(1169) 年記事に同じ表現があるように〔ノヴゴロド第一年代記(6): 注 159〕、いわゆる「ザヴォロチエ地方」(Заволочье) のことで、ここでは、スーズダリ公 (フセヴォロド [D177:K]) と領地紛争になっていたベロオゼロ湖 (Белоозеро) 周辺と Шексна 川 (Шексна) 上流地帯を指していると思われる〔ノヴゴロド第一年代記(6): 注 159〕。

113) この「ノヴゴロド人」(новгородцы) は、ヤロスラフ [D1153] によって派遣された徴税官 (данники) および商人たちを指している。

114) 「ヴラジミルの城内を自由に歩いていた」は *Км* の読みの訳だが、写本によって次のような異読がある。*Км хожаху по граду Володимиру по своен воли; Ак хожаду по городу по своен воли въ миру; Сн хожаху по городу по воли Володимири*。

115) 6704(1196) 年記事の冒頭にこの聖キュリロス教会の定礎、建築、献堂について書かれており (上注 85～95)、1197 年 1 月 12 日に大主教マルティーリイの手で献堂式が行われたことも書かれている。おそらく、時系列的に正しい位置にある本記事が先ず書かれて、6704(1196) 年冒頭の記事の建築、献堂の部分は後になって書き足されたものだろう。

116) 聖枝祭の主日 (на верьбницу) とは復活祭一週間前の日曜日 (主日) で、1197 年 3 月 30 日の日曜日に相当する。伝承によればこの祝日はキリストのエルサレム入城を記念するものであり、新しい公のノヴゴロド入城の日として適した祝日選ばれたのだろう。

メオンの日まで¹¹⁷⁾》6ヶ月のあいだひとりで〔公座に〕座していた¹¹⁸⁾。

そして、〔ノヴゴロド人は〕かれ〔ヤロポルク〕をノヴゴロドから追放した。そして、〔ノヴゴロド人は〕再び使節を〔ヴラジミルへと〕派遣して、ヤロスラフ [D1153] を〔ノヴゴロド公にと〕求めた。《ヤロスラフは》ノーヴィ・トルグからヴラジミルへ、フセヴォロド [D177:K] によって召喚されていたのである。ノヴゴロドから〔使節として〕行ったのは、身分の高い者たちと百人長¹¹⁹⁾ だった。

そして、〔ノヴゴロドの使節団は〕真っ正直に名誉をもって¹²⁰⁾ ヤロスラフ [D1153] を〔ノヴゴロド公として〕受け容れた。そして、〔ヤロスラフは〕冬の洗礼祭の一週間後¹²¹⁾ に〔ノヴゴロドへ〕やって来た。そして、〔ヤロスラフは〕自分の公座に座した。そして、〔ヤロスラフは〕人々と相和して、すべては善くなった。

そして、〔ヤロスラフは〕市長官ミロシカを連れて来た。《市長官ミロシカは〔ノヴゴロドへ〕

117) 「シメオンの日まで」(до Сменва [дъни]) の読みは Сн だけにあり、この「シメオン」(Смен) は、5 世紀シリアの「柱頭行者聖シメオン」(ハリストス正教会「登塔者」)(святѡй Симеон Столпник; Συμεών ὁ Στυλῖτης) を指しており、その祝祭日は 9 月 1 日である。

118) 「6 ヶ月のあいだひとりで〔公座に〕座していた」(сѣдѣвши ему одну 6 мѣсяць) とは、1197 年 3 月 30 日にノヴゴロドに入城して、同年の 9 月 1 日になる前（前注）すなわち 8 月 31 日に追われたとすると、ヤロポルクが公座に就いていたのは、155 日間すなわち 5 ヶ月と 1 日になるが、ここでは 3 月～8 月と「六つの月にわたって」という意味で 6 ヶ月と書いたのだろう。「ひとりで」(одину) とは、年少の公がかれを補佐する有力者もなしにという意味ではないか。

119) 「身分の高い者たちと百人長」(Км прежнии мужи и сочкыи; Ак, Сн переднии мужи и сочкыи) の「身分の高い者」については、上注 18 を参照。「百人長」はおそらく単数形であり、この場合は、百人長ニキフォル(Микифор)(上注 72)である可能性が高い。かれは、1195/96 年冬に派遣されたフセヴォロド [D177:K] のもとへの使節団の一員であり（上注 70 以降）、無事に帰郷したが、様子が分かる人物ということで再度派遣されたのだろう。

120) 「真っ正直に名誉をもって」(во всю правдою и честию) は、使者が交渉事をまとめるときの定型表現。1172 年記事にも同様の表現がある。〔ノヴゴロド第一年代記 (6) : 注 212〕参照。

121) 「冬の洗礼祭の一週間後」(на зиму по Крещении за недѣлю) は前写本に共通。洗礼祭(Крещение)(神現祭 Богоявление とも言う)は固定祭日で、1198 年 1 月 6 日の日曜日にあたり、その一週間後だから、1 月 11 日の日曜日に、ヤロスラフはノヴゴロドに到着したことになる。たしかに「冬」に相当している。

帰郷した》¹²²⁾。かれはノヴゴロドから離れて2年のあいだ〔獄中に〕居た¹²³⁾。〔捕らえられている者の〕全員が¹²⁴⁾ まったく害されずに帰郷した。そして、《ノヴゴロドでは》若者から壮年者まで¹²⁵⁾ 全員が喜んだ。

同じ年、ノヴゴロド大主教マルティールイが、中州に聖ニケフォロス¹²⁶⁾ (святѣи Никифор) の教会を建てた¹²⁷⁾。

同じ年、プロトニツキイ区 (в Плотниках) に、聖女エウフェミアの修道院 (монастырь

122) 異読があり、*Км, Ак* Мирошку посадника приведе; *Сн* Марошка приде посадникъ。前者 (*НІ-М*) は文脈から見て、ノヴゴロド公としてやって来た Ярослав が主語だが、構文的にはやや不自然である。おそらく本来の *Сн* (*НІ-С*) の読みを、*НІ-М* で解釈的に改変したのだろう。ただし、史実としては、*НІ-М* の通り、ウラジミルから到来したヤロスラフ [D1153] の一行が、市長官ミロシカを連れてノヴゴロドへ来たと考えられる。

123) 「ノヴゴロドから離れて2年のあいだ〔獄中に〕居た」(сѣдѣвша 2 лѣта за Новѣгород) の сѣдѣти はここでは監禁されていたということ。また、за Новѣгород は対格支配なので、文法的には「ノヴゴロドの利益のために」と解釈すべきだろうが、ここでは、造格支配の意味「ノヴゴロドの外で」(本来はノヴゴロドの内に居るべきところを) の意味を掛けて、二つの意味で使っていると考えられる。翻訳はひとまず後方で訳した。

なお、なお、ミロシカは、ボリス、イヴァンコ、フォマと共に、1196年1月頃にスーズダリにおいて、フセヴォロドの手で捕らえられたと考えられる(上注80参照)。

124) この「全員」(все) とは、フセヴォロド [D177:K] が自領地内およびザヴォロチエ地方で捕えられ、ウラジミルで留置されていたノヴゴロド人の官吏および商人のことを指している(上注115, 34)。かれらは、ヤロスラフ [D1153] がノヴゴロドへ赴任するときに、その一行に連れられてノヴゴロドへ帰郷したのである。

125) 「若者から壮年者まで」(от мала и до велика) は、これ以降の本年度記で頻繁に使われる定型表現。特定の集団における下位の者たちも上位の者たちも挙って全員が、という意味の強調表現。ここでは、使節団を送り出したノヴゴロドの民会が、その集団に相当するのだろう。

126) 「聖ニケフォロス」(*Км, Сн* Никифор; *Ак* Никыфор) はアンティオキアの殉教聖人ニケフォロス (Νικηφόρος)(† 257年頃) のことで、祝祭日は2月9日 [Лосева 2001: С. 266]。

127) 「中州の聖ニケフォロス教会」(церковь на островѣ святого Никифора) は本記事が史料における唯一の言及であり、おそらく木造でその後廃堂されたと思われ、場所の特定は難しい。ノヴゴロドで「中州」に建てられた教会としては、15世紀の記録に「中州のニコラ教会」(церковь Николы на Островке) がある。これは、ノヴゴロド内城(Детинец, Кремль) 東側の「主教岸」(Владычный берег) に形成された中州に建てられた教会で、おそらくこの場所に建てられた可能性が高い [Великий Новгород 2009: С.525: Николы на Островке]。

なお、当時のキエフ府主教は1183年に叙任され1201年頃まで務めたニキーフオル二世(Никифор II) であり、大主教マルティールイによるその守護聖人に献堂した教会建設は、当時のノヴゴロド大主教座とキエフ府主教との間の良好な関係を示唆しているのではないかと [Янин 2008: С. 90]。

святыя Еуфимиа) が建てられた¹²⁸⁾。〔これを建てた奉献者は〕ジロシカの娘で、ゴロディシニク (?) の息子ポリュード〔の寡婦である〕女性だった¹²⁹⁾。

6706 (1198) 年

神を愛する大主教マルティーリイは、ルーサ (Руса) の自分の修道院において¹³⁰⁾、聖なる〔主の〕変容の石造りの教会を定礎した¹³¹⁾。建設が始まったのが5月21日《聖なるコンスタンティノス帝とヘレナの記念日》で、終わったのが7月31日《聖ウリタの記念日》だった¹³²⁾。そして、〔大主教マルティーリイは〕自らこの教会の献堂式を行った。聖なる聖母就寝の記念日のことだった¹³³⁾。

128) 「聖女エウフェミアの修道院」(монастырь святыя Еуфимиа) は、4世紀初頭の大殉教聖女エウフェミア (Евфимия; Εὐφημία) に捧げられた女子修道院。商業地区 (Торговая сторона) のプロトニツキイ区 (Плотницкий конец) 北端に建設され、現在のボリス＝グレーブ教会 (церковь Бориса и Глеба в Плотниках) の近くにあった。[ヤーニン 2001 : 10 頁] の地図に「エフィーミ修道院」と (誤記されて) 示されている。

129) 「ジロシカの娘で、ゴロディシニク (?) の息子ポリュード〔の寡婦〕」は異読がある。*Км* Полюжая Жирошкѣ городъшиница дщи; *Ак* Полюжаа городшинича Жирошкина дъщи; *Сн* Полюжая городъшиница Жирошкина дъщи。後半部分の Жирошкина дъщи は、ジロシカ (Жирошка) という人物の娘ということで間違いない。6644(1136) 年の項に ノヴゴロド 貴族の名として、Жирослав(ич) が見えるので、おそらく Жирошка は Жрослав の通用名で、プロトニツキイ区に拠点を置いていた貴族の名と推測される。前半部分の Полюжая городъшиница は解釈が難しく、городъшиница を人名 (父称) の固有名詞と理解する説もあるが、ゴロディシニク (городъшник) という官職にあった者の息子と解釈したい (ただし、городъшник/городчиник という官職名は他の史料にはない。商業地区外城 (окольный город) の管理者だったか?)。そして городъшиница は、その所有形容詞女性主格形であることから、その者の妻 (文脈からみて寡婦だろう) であり、その夫の名は「ポリュード」(Полюд) (Полюжая 所有形容詞女性主格形) であると判断した。なお、Полюд の名は 1268 年に殺されたノヴゴロド 貴族の名にあり、やはり貴族だったと考えられる。

130) 「自分の修道院において」(въ своемъ монастырь) は *Км* のみにある補足的な読み。

131) これは、6700(1192) 年の記事にある、ルーサの中州にマルティーリイが木造で建てた「救世主変容修道院」(Спасо-Преображенский монастырь) [ノヴゴロド第一年代記 (6) : 注 470] を石造りに建て直した (別の場所だったようだが) という事。

132) この教会建設は 72 日かかった計算になる。

133) 「聖なる聖母就寝の記念日」(на Успение святыи Богородици) は、聖母就寝祭 (Успение пресвятой Богородицы) のことで、ここでは 1198 年 8 月 15 日に相当する。本来なら、教会の祝祭日である主の変容の日、8 月 6 日に献堂式が行われるのが相応しいが、何らかの事情で一週間後の正教の祝祭日にあたるこの聖母就寝祭の日に行われたものか。あるいは、以下のマルティーリイの祈禱文にあるように、特に聖母による加護を願ってこの日に定めたのかもしれない。

〔大主教マルティーリイは〕この尊い祝祭を執行し、奉事を執り行った¹³⁴⁾。そして、祈ってから次のように言った。

「主なる神よ。天より注視して見て下さい。そして、自らの葡萄園を訪れて下さい。あなたが右手で植えられた〔株〕を顧みて下さい。どうか、この教会〔聖堂〕をご覧下さい。これは、あなたの僕たるわたし、大主教マルティーリイが建てたものです。あなたの聖なる変容の名において〔記念した聖堂です〕。さらに、どうか、この教会で信仰をもって祈る者には、その祈りを聞き届けて下さい。そして、聖なる聖母とすべてのあなたの聖人たちの祈りによって、その者の罪を赦して下さい。アミン」¹³⁵⁾。

そして、福者〔マルティーリイ〕は心と魂を¹³⁶⁾ もって楽しみ、自分には永遠の記憶を作り上げ¹³⁷⁾、全てのキリスト教徒には尊い修道院を建てたのだった。

同じ年、春のこと、ヤロスラフ [D1153] 公の二人の息子が逝去した。イジャスラフ (Изяславъ) [D11531] は公として支配するためにルーキ (Луки) に据えられていた。そして、ノヴゴロドのためにリトアニア人からの防衛を行った。そして、そこ〔ルーキ〕で逝去した¹³⁸⁾。他方、ロスチスラフ (Ростиславъ) [D11532]¹³⁹⁾ はノヴゴロドで〔逝去した〕。二人は、修道院の聖ユーリイ (святыи Георгии) 〔教会〕に安置された。

同じ年、ヴラジミル [D115] の息子でムスチスラフ [D11] の孫にあたる大いなる公ヤロスラフ [D1153] は、石造りの教会を定礎した。それは、聖なる主の変容の名で、ノヴゴロドの《丘の》

134) 「奉事を執り行った」(службу створи) とは、具体的には献堂式の際に聖体礼儀を行ったということ。
Акの補筆・改変された部分では、святую литургию съврши と改変されている。

135) この祈祷文は、996年にウラジーミル聖公 [06] が十分の一教会を建てたときの祈祷文 [№ 117] 〔ノヴゴロド第一年代記 (2) : 注 789〕と基本的に同一である。この祈祷文は、献堂式のときに主教が唱える奉事の祈祷文ではなく、ウラジーミル聖公が唱えているように、献堂者 (ктитор, заказчик) が唱えるもののようである。それゆえ、ここでは、マルティーリイは出身修道院の教会堂の献堂者として振舞っていることになる。

136) 「心と魂をもって」には異読があり、Км, Ак сердцемъ и душею; Сн душею и теломъ。これは二種類とも典礼書で使われる常用句だが、веселиться (楽しむ) と結合するのは前者だけである。おそらく、本来後者 Сн の読みだったものが、不自然であることから、前者へと改変されたのではないか。

137) この「永遠の記憶を作り上げ」(устроишь себѣ память въчную) から、この主の変容教会建設の記事が、マルティーリイの死後に書かれ、ここに挿入されたことは明らかである。

138) イジャスラフ [D11531] の誕生については、Снによると 1190 年であることから、この時 8 歳だった〔ノヴゴロド第一年代記 (6) : 注 451〕

139) ロスチスラフ [D11532] の誕生については、Снによると 1193 年であることから、この時 5 歳だった (上注 42)。

ネレディツィにおいて（на Нередицахъ）だった¹⁴⁰⁾。そして、職人たちが、6月8日の聖テオドロスの日に建設を始め、9月に「建設を」終えた。

同じ年の秋、ポロツク人がリトアニア人とともにルーキを攻めるべく到来した。そして家屋を焼いた。ルーキ人は警戒して、内城に籠った¹⁴¹⁾。

同じ年、聖なる預言者エリヤ（святый пророк Ильи）の石造りの教会が、丘に（на Холмѣ）定礎された¹⁴²⁾。

同じ年の冬、ヤロスラフ公[D1153]は、ノヴゴロド人、ブスコフ人、ノーヴィ・トルグ人、ラドガ人、ノヴゴロドの全領地とともに¹⁴³⁾、ポロツクへ向けて進軍した。

そして、ポロツク人は、カスプリャ湖¹⁴⁴⁾において、「遠征軍を」出迎えて拝礼した。そして、「遠征軍は」和を結ぶと、ノヴゴロドへ帰還した。神がキリスト教徒に《お互いの》流血を与えなかったのである。

140) 現存する「ネレディツァの聖救世主教会」（Церковь святого Спаса на Нередице; Спас на горе Нередице; Спас-Нередица）のこと。内城から南へ約1.5kmほどの小ヴォルホヴェツ川（Малый Волховец）右岸の扇状地の丘（гора）の上にあり、城塞地区（Рюриковое городище）に接している。

141) 「内城に籠った」（избыша в городѣ）の内城（город）とは、ヴェリーキエ・ルーキ中心部のロヴァチ河岸の、現在は「Вал」もしくは「Крепость」と呼ばれる場所に築かれていた城砦のこと。6675(1167)年にスモレンスク勢のロマン[J1]とムスチスラフ[J5]がルーキを焼いたときも、住民（ルーキ人）は同様に内城に籠っている〔ノヴゴロド第一年代記(6)：注123〕。

142) 「丘」（Холм）はスラヴェンスキイ区（Славенский конец）の南東部分のこと〔ノヴゴロド第一年代記(5)：注408〕。1146年に焼失したエリア教会の聖堂を木造で再建しているが、経年で古びたために石造りに建て替えたものと思われる。

143) 「ノヴゴロドの全領地とともに」（со всею областью новгородчкою）は、上掲の各城市が派遣した市民軍だけでなく、ノヴゴロドの地（Новгородская земля）の全域から軍兵を徴兵したことを指している。

144) 「カスプリャ湖」（озеро Касопля; озеро Каспля）は、カスプリャ川（река Каспля）源流の湖の名前で、スモレンスクから北西34kmほどの場所にある。ノヴゴロドおよびポロツクからスモレンスクへ行く川沿いにあり、ノヴゴロド領、スモレンスク領、ポロツク領共通の国境地点に位置している。ここが、ヤロスラフ公が招集したノヴゴロド遠征軍の集合地点となっていたのだろう。

参考文献

- Баженова 2006 — Баженова А.И. Славян родные имена: словарь исторических родокоренных имен и прозваний славян и русов за два тысячелетия. М., 2006.
- Виноградов 2023 — Виноградов А. Ю. Выборы епископов в русской церкви домонгольского периода // ASPIRATIO. Журнал церковно-гуманитарных исследований. 2023. № 1. С. 10-43.
- Гимон 2001 — Гимон Т.В. Летописные данные о новгородском семействе Малышевичей: Конец XII — первая половина XIII в. // Столичные и периферийные города Руси и России в средние века и раннее новое время (XI–XVIII вв.) : Докл. второй науч. конф. (Москва, 7-8 декабря 1999 г.) . М., 2001. С. 187–196.
- Гимон 2014 — Гимон Т. В. Новгородское летописание XI – середины XIV в. как социокультурное явление. Диссертация на соискание ученой степени доктора исторических наук. М., 2014.
- Гиппиус 2005 — Гиппиус А. А. К биографии Олисея Гречина // Церковь Спаса на Нередице: От Византии к Руси: К 800-летию памятника / Отв.ред.: О. Е. Этингоф. М., 2005. С. 99-114.
- Гиппиус 1997 — Гиппиус А. А. К истории сложения текста Новгородскойпервой летописи // Новгородский исторический сборник. Вып. 6 (16) . СПб., 1997. С. 3–72.
- Гиппиус 2009б — Гиппиус А. А. Архиепископ Антоний, новгородское летописание и культ св. Софии // Хорошие дни... : Сборник памяти А. С. Хорошева М., 2009. С. 181-198.
- Гиппиус 2017 — Гиппиус А. А. Кто был «первый ходатай нашему спасению»? (К дискуссиям о проложных житиях киевского цикла) // Русь эпохи Владимира Великого: государство, церковь, культура : материалы Международной научной конференции в память тысячелетия кончины святого равноапостольного князя Владимира и мученического подвига святых князей Бориса и Глеба, Москва, 14–16 октября 2015 г. / Рос. акад. наук, Ин-т рос. истории, Ин-т археологии, Науч. совет «Роль религий в истории» ; отв. ред. Н. А. Макаров, А. В. Назаренко. – М; Вологда, 2017. С. 341-350.
- Карпов 2017 — Карпов А. Ю. Русская церковь X-XIII вв.: Биографический словарь. М., 2017.
- Мейендорф 2000 — Мейендорф Иоанн, протопресвитер. История Церкви и восточно-христианская мистика. М., 2000.
- Пашуто 1965 — Пашуто В. Т. Особенности структуры Древнерусского государства // Древнерусское государство и его международное значение. М., 1965. С. 77-127.
- Полный месяцеслов Востока I — архиепископ Сергей (Спасский) Полный месяцеслов Востока Том I. Восточная агиология. М., 1997. (репринт. изд. 1901) .
- Православная энциклопедия Т. 1 - 45 — Православная энциклопедия: Т. 1-45, М., 2000-2015. (Электронная версия <http://www.pravenc.ru/>) .
- Прозоровский 1877 — Прозоровский Д. И. О родословии св. Антония, архиепископа новгородского, СПб., 1877.
- ПСРЛ Т. 10, 2000 — Летописный сборник, именуемый Патриаршей или Никоновской летописью (Полное собрание русских летописей. Т. 10) . М., 2000.
- Таланин 2015 — Таланин В. И. Древнерусская доваряжская аристократия X-XVI вв. и её потомки: генеалогическое исследование. Запорожье, 2015.
- Янин 2008 — Янин В. Л. Очерки истории средневекового Новгорода М., 2008.
- ノヴゴロド第一年代記 (2) — 中沢敦夫『ノヴゴロド第一年代記 (新編集版)』翻訳と注釈 (2), 『富山大学人文学研究』 (第77号, 2022年8月) 167-271頁。

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈（7）

ノヴゴロド第一年代記（4） — 中沢敦夫『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈（4），『富山大学人文学研究』（第79号，2023年8月）127-177頁。

ノヴゴロド第一年代記（5） — 中沢敦夫『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈（5），『富山大学人文学研究』（第80号，2024年2月）181-269頁。

ノヴゴロド第一年代記（6） — 中沢敦夫『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈（6），『富山大学人文学研究』（第78号，2024年8月）105-177頁。

ヤーニン 2001 — V・L・ヤーニン著，松本栄三，三浦清美訳『白樺の手紙を送りました — ロシア中世都市の歴史と日常生活』（山川出版社，2001年）。

※ 年代記とその写本の略号については，[ノヴゴロド第一年代記（1）：212-213頁]を参照。

〔後記〕

本稿は共同研究「『ノヴゴロド第一年代記』講読会」の研究活動の成果である。講読会の参加者は次の通り。宮野裕（岐阜聖徳学園大学教育学部教授），岡本崇男（神戸市外国語大学名誉教授），今村栄一（公益財団法人河川財団名古屋事務所研究員），草加千鶴（創価大学非常勤講師），伊丹聡一郎（明治大学大学院博士後期課程），岸慎一郎（塾講師）。

